

人間関係の悩みはいつの世も尽きないものです。「相手が悪い」の一点張り、対立状態のままでは永遠に改善は見込めません。

倫理運動の創始者・丸山敏雄は、『万人幸福の契』第四条の中で、「親子、夫婦、交友、隣人、すべてがわが鏡であって、わが心のままに変わって行く」と述べています。

創始者の言葉からも、あらゆる人と接する中で、相手の姿そのものを我が心の鏡としてとらえることにより、問題解決の糸口が見つかってくるのが読み取れます。

大学卒業後、一般企業に勤務していたMさんは、倫理法人会に入会後、一念発起して地元の小規模の老人介護施設をオープンしました。経営者としてだけでなく現場での仕事も行ない、数名のスタッフと共に利用者の介護をしていました。

おむつ交換や食事・入浴の介助など、初めて経験することばかりでしたが、スタッフにアドバイスをもらいながら、目の前の仕事に日々励みました。しばらくしてMさんは、初めて夜勤のシフトに入りました。要介護度の高い寝たきりの人や、重い病気を抱えた人もいて、いつ何が起きるか分からない状況での勤務にMさんの心は不安で覆われます。しかし、その日は大きなトラブルもなく、入居者の朝食を準備するまでの間、食堂で休憩していました。

すると夜中の二時頃、認知症を患う八十代の女性が部屋から出てきて、Mさんの方にゆっくりと歩いてくるのです。「どうされましたか？」と声をかけても無反応で、そ



自らの習慣を顧みて 共感と受容の力を養う

の距離はどんどん縮まっていきます。恐くなったMさんは事務所に逃げ込み、鍵をかけてやり過ごし、朝を迎えたのでした。その後、交代の時間になり、出勤してきたベテラン介護士に一連の状況を説明しました。夜勤を終えて自宅に戻り、自身の心行ないを省みることにしたMさん。自分はどうして逃げてしまったのか、どのように対応すればよかったのかを考えました。そこで浮かんできたのは、その女性とのコミュニケーションが圧倒的に不足していたことでした。認知症の知識が乏しく、介護士としての経験も不足していたMさんは、女性に対し苦手意識を持っていたため、日頃から接触を避けていたのです。

気づきを即行動に移すべく、まずは交流の時間を作ることから始めました。昼休みや帰宅前に、女性の部屋に挨拶に伺い、時には並んで座り、たとえ数分でも発する言葉に耳を傾けました。相手への「共感」と「受け容れる」ことを意識し、繰り返される内容にも私情を挟まず聴き続けたのです。歩み寄る姿勢を継続すると、変化が表れました。無表情だった女性に笑顔が見られるようになり、時には個人的にプレゼントを贈られるまで二人の関係性が深まっていったのです。

Mさんは女性に対する心と行動の壁を取り払い、話を聴くことに努めました。その行動は、人とかかわる中で自分の心癖や習慣を素直に見つめ返したからこそできたことと言えるのではないのでしょうか。